

「子どもの食生活と躰についての総合的研究」(5)

A general research on the child development on eating habits and teaching manners (5)

「板橋区高島平における母親を対象とした子どもの食生活と躰に関する事例調査」

川合 貞子(E, 2), 千田真規子(E, 1), 猪俣美智子(B, a), 上里千穂子(B, b), 斉藤 尚子(1, A1), 武石 仁美・福田 啓子(C, 1～9), 村木由紀子(D)

1. 調査の概要

$$\text{まるやま幼稚園} = \frac{40}{50} = 80\%$$

(1)調査の概要

目的：板橋区における「子どもの食生活と躰」の実態を大都市の一事例として把握する。
対象地域：東京都板橋区 高島平近辺
対象者：大東文化大学附属青桐幼稚園、まるやま幼稚園の4・5歳児の母親
手続・方法：幼稚園を通して依頼し、園児の母親を対象に、質問紙によるアンケート調査

時期：昭和59年12月1日～12月10日

調査事項：

- A. 基本的属性（年齢、就業状況、職場、学歴、家族構成、住居）
- B. 食形態（食作法－食事場所、食卓、座席、食器、箸箱・箱膳の使用、食事時間・回数、所要時間、用意とあと片付け 食法－調理時間、献立、外食）
- C. 子どもの食行動（食事内容・時間、準備やあと片付けの手伝い、食事の際の注意、好き嫌い、箸のもち方、躰の主体）
- D. 食習慣（行事食とその意味・由来、神棚や仏壇、供物とその手伝い、食事にまつわる故事）

回収状況：青桐幼稚園： $\frac{84}{120} = 70\%$

$$\text{計} \frac{124}{170} = 72.9\%$$

集計：質問項目毎の単純集計

(2)対象地域の概況

調査対象として選択した板橋区の地勢、歴史的概容、人口・産業等の推移について、その特性を次に述べる。

①地勢

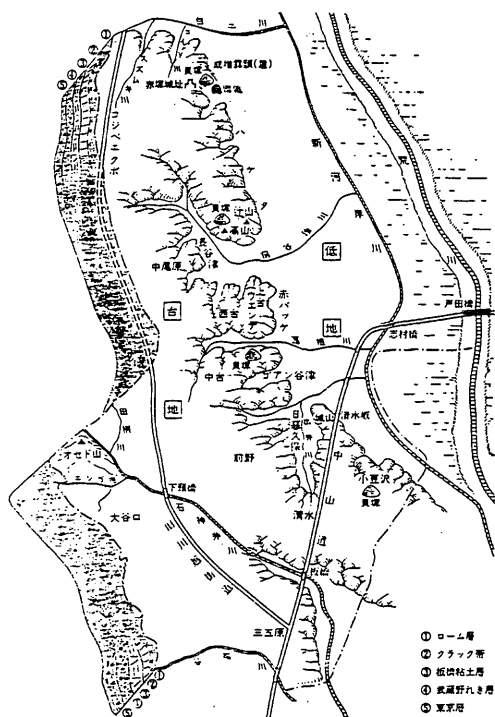
板橋区：

東京都23区の中で、北西部に位置し、面積は31.9km²。東は北区、西は練馬区と埼玉県和光市に、南は豊島区、北は荒川をへだてて埼玉県戸田市と接している。

板橋区は、平均海拔30m前後の武蔵野台地の東北端にあたる部分と、荒川の沖積低地によって形成され、またいくつかの川の谷が縦横に走っているため起伏に富んでいる。海拔の最高は35.5m、最低は2mである。

かつては武蔵野の面影が至るところに残っていたが、現在では近代ビルが建ち、高速道路が走る、首都東京の一面を担う景観となっている。

昭和7年に「板橋町」が周辺の村を合併して「板橋区」となり、昭和22年8月1日には総面積の60％が分離して練馬区が誕生した。その後、



昭和25年4月1日に戸田町の一部約0.2km²が編入されて現在に至る。

②歴史的概容

23区内では、世田谷区に次いで2番目に遺跡が多い板橋区には、石神井川流域や荒川谷の支谷に旧石器時代の遺跡が点在している。茂呂遺跡を代表に、縄文時代の稲荷台遺跡や小豆沢貝塚、弥生時代の西台遺跡や前野町遺跡がある。

奈良時代には、この地方は武蔵国豊島郡に属していた。治承4年(1180)、源頼朝がこの地に陣をはり、義経がはせつけたという。

「板橋」が最初に登場する文献は『源平盛衰記』だといわれ、鎌倉時代中期以降にこの地名が世に知られ始めたと考えられている。そして鎌倉時代から室町時代にかけて豊島氏がこの地を支配していた。

1379年に赤塚郷(現在の赤塚・徳丸・成増あたり)は、足利家より京都の鹿王院に寄進される。その後、千葉の市川城を落とされた千葉氏

(上杉方)が赤塚城に入ることになり、やがて豊島氏も滅びて、板橋地方を含める広大な地域を治めるようになった。

しかし、上杉氏が勢力を失った後、北条氏にとって変わったものの長くは続かず、天正18年(1590)に北条氏の小田原城が落成して、千葉氏も滅んだ。

江戸城の徳川家康が支配し、幕府を成立させると、この地域は直轄領と大名・旗本領がいりまじることになった。一里塚や街道が整備され、板橋は中山道の第一の宿場となり、参勤交代制がしかれた為に大きく栄えた。川越と江戸を結ぶ川越街道もこの地を通っていたが、食糧を江戸に運ぶ重要な街道であった。

宿場の周辺の村では、江戸近郊農業として野菜作りが盛んになり、中でも大根は主要作物とされた。荒川の上流に雨が降れば、水をかぶってしまう低地は、広大な土地で幕府が「徳丸ヶ原」と名付けて、大砲・小銃の試射場及び鷹狩場となっていた。

明治になると江戸は東京と改められ、板橋地域の18ヵ村は東京府に属することになった。同11年に北豊島郡に編入され、同22年の市制町村制によって、板橋地域には一町三ヵ村(板橋町・志村・上板橋村・赤塚村)が成立。

明治16年に、上野～熊谷間に鉄道が開通し、板橋宿は急速に衰退する。同18年には赤羽～品川間も開通し、板橋駅が開設された。

大正3年には、私鉄の東上線が池袋～川越間に開通。昭和7年東京市板橋区となった。

現在「高島平」と呼ばれているところは、江戸時代に徳丸ヶ原と呼ばれていた場所である。明治3年に民間に払い下げられて、水田耕作が始まったが、低地のため水害の心配が常にあった。同43年に大洪水があり、翌44年から治水工事が行なわれ、10年かかって今日の荒川の姿となった。その後、この土地は「赤塚たんぼ」・「徳丸たんぼ」と呼ばれる美田となり、皇室の御料にもなった良米がとれたという。昭和16年頃から戦争をはさんで33年末まで、前後17年間、田

地の効率をよくする為に手が加えられた。しかし、10年ほどで地下水が涸れたり、灌漑用水に汚染がまじるようになって耕作は中止される状態になってしまった。

昭和40年に住宅公団は高島平団地の建設を決定。41年から47年にかけて宅地開発がなされ、かつて将軍のお鷹場だった徳丸ヶ原も都内最大の高層住宅団地と変化した。43年には高島平～巣鴨間に都営地下鉄6号線が開通、51年までには西高島平～三田まで延び、宅地化が進んだ。

③人口・世帯の推移

表1-1 旧板橋町人口の累年増加

年 次	人口	指数
明治20(1887)	3,415	100
// 25(1892)	4,968	145
// 30(1897)	5,300	155
// 35(1902)	5,832	171
// 40(1907)	8,333	244
大正 1(1912)	11,305	331
// 5(1916)	12,777	374
// 9(1920)	16,237	475
// 14(1925)	25,983	761
昭和 5(1930)	44,713	1,309

「板橋区の歴史」より

表1-2 人口の推移

年 次	世 帯 数	人 口				
		総 数	男	女	対 前 年 増 加 数	一世帯 あたりの 人員
昭和 4 5 年	149,542	471,777	242,413	229,364	△ 6,793	3.2
4 6	158,784	473,278	242,511	230,767	1,501	3.0
4 7	159,788	486,301	248,430	237,871	13,023	3.0
4 8	161,537	489,300	249,122	240,178	2,999	3.0
4 9	162,447	490,949	249,477	241,472	1,649	3.0
5 0	173,279	498,286	254,671	243,615	7,337	2.9
5 1	173,727	498,046	254,291	243,755	△ 240	2.9
5 2	175,057	499,599	254,701	244,898	1,553	2.9
5 3	176,014	501,076	255,359	245,717	1,477	2.8
5 4	176,701	500,792	255,011	245,781	△ 284	2.8
5 5	187,542	498,266	252,626	245,640	△ 2,526	2.7
5 6	188,502	499,494	253,102	246,392	1,456	2.6
5 7	190,107	499,134	253,141	245,993	△ 360	2.6
5 8	193,312	502,899	254,907	247,992	3,765	2.6
5 9	195,920	505,791	256,577	249,214	2,892	2.6

「板橋区の統計59年」より

天保14年(1834)の板橋宿は、573軒(うち旅籠54軒)2448人と記録されている。

旧板橋町の人口は、明治20年(1887)3415人で、これを100とした表が左のものであるが、大正14年には7.6倍、昭和5年に13倍と急増していることがよくわかる。同5年の志村12152人、上板橋村は8454人、赤塚村は6759人。

昭和7年に板橋区が成立した時には12万168人、同15年は23万3115人と大きく増加。終戦時には少し減少するが、その後、昭和40年頃まで増え続けた。41年以降の人口は減ったり増えたりしており、特に近年では横ばいに近い状態になっている。世帯数については、高島平地区の開発やマンションの増加によって増え続けている。一世帯あたりの人員は昭和30年に4.4人だったが、40年に3.5人、50年は2.9人、そして59年には2.6人と減少傾向にある。

④産業

板橋の工業化の素地は、明治9年に作られた陸軍造兵廠、火工廠、板橋火薬製造所などの軍関係の工場が始まりだった。第2次大戦中は軍需中心の工業だったが、戦後は平和産業に切り

表1-3 産業大分類別事業所数及び従業者数(板橋区)

()内は構成比

産業大分類	事業所数					従業者数					
	昭和44年	昭和47年	昭和50年	昭和53年	昭和56年	昭和44年	昭和47年	昭和50年	昭和53年	昭和56年	
総数	19,344 (100%)	22,537 (100%)	24,710 (100%)	26,422 (100%)	27,966 (100%)	186,314 (100%)	201,237 (100%)	203,819 (100%)	214,965 (100%)	222,547 (100%)	
農業	15 (0.1)	15 (0.1)	22 (0.1)	22 (0.1)	26 (0.1)	35 (0.0)	32 (0.0)	79 (0.0)	101 (0.0)	85 (0.0)	一 次 産 業
林業・狩猟業	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	
漁業・水産養殖業	- (-)	- (0.0)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	
鉱業	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	二 次 産 業
建設業	1,050 (5.4)	1,377 (6.1)	1,610 (6.5)	1,782 (6.7)	1,840 (6.6)	10,301 (5.5)	14,098 (7.0)	14,337 (7.0)	15,894 (7.4)	16,105 (7.2)	
製造業	4,563 (23.6)	5,291 (23.5)	6,020 (24.4)	5,944 (22.5)	6,114 (21.9)	93,654 (50.3)	87,692 (43.6)	81,204 (39.9)	77,340 (36.0)	76,639 (34.5)	
卸売業・小売業	8,936 (46.2)	10,045 (44.6)	10,553 (42.7)	11,476 (43.4)	11,568 (41.3)	37,572 (20.2)	42,458 (21.1)	46,435 (22.8)	51,567 (24.0)	55,238 (24.8)	三 次 産 業
金融・保険業	225 (1.2)	235 (1.0)	251 (1.0)	268 (1.0)	281 (1.0)	4,481 (2.4)	4,845 (2.4)	5,531 (2.7)	5,869 (2.7)	5,870 (2.6)	
不動産業	640 (3.3)	742 (3.3)	1,003 (4.0)	1,182 (4.5)	1,138 (4.0)	1,383 (0.7)	1,695 (0.9)	2,469 (1.2)	2,930 (1.4)	2,806 (1.3)	
運輸・通信業	393 (2.0)	645 (2.8)	726 (2.9)	828 (3.1)	1,821 (6.5)	13,479 (7.2)	16,365 (8.1)	16,750 (8.2)	18,165 (8.5)	19,958 (9.0)	
電気・ガス・水道・熱供給業	14 (0.1)	17 (0.1)	14 (0.1)	15 (0.1)	12 (0.1)	325 (0.2)	443 (0.2)	360 (0.2)	491 (0.2)	470 (0.2)	
サービス業	3,508 (18.1)	4,129 (18.3)	4,468 (18.1)	4,860 (18.4)	5,118 (18.3)	25,084 (13.5)	30,651 (15.2)	33,166 (16.3)	39,135 (18.2)	41,890 (18.8)	
公務	… (…)	40 (0.2)	43 (0.2)	45 (0.2)	48 (0.2)	… (…)	2,947 (1.5)	3,488 (1.7)	3,473 (1.6)	3,486 (1.6)	

資料：東京都総務局統計部「事業所統計調査報告」

かえ、現在では光学器械工業が第一位となっている。

商業は、江戸時代の宿場町が始まりとされ、戦後の復興も旧中仙道、旧川越街道筋からといわれている。

表1-3を見ると、当然ではあるが農業は非常に少ない。56年度の事業所別では、第二次産業28.5%，第三次産業71.2%となっている。従業者数を見ると製造業が34.5%で最も多く、続いて卸売業・小売業・サービス業となっている。

参考・引用文献

- 「板橋区の歴史」S55.1
- 「わが町・いまむかし」S57.10
- 「板橋区勢要覧 60年度版」S60.3
- 「第16回 板橋区の統計 59年」S60.3

2. 結果と考察

本論文次の以下の表について、実数は頻度(単位：人)を、()内の数字は%を示す。

A. 基本的属性

- (1)対象者：124名
- (2)性別：女性(園児の母親)
- (3)平均年齢：34.7歳(父親-38.0歳)
- (4)就業状況：

表A-1

単位：人

就業者	非就業者	無答	計
21 (16.9)	101 (81.5)	2 (1.6)	124 (100.0)

「子どもの食生活と蟬についての総合的研究」(5)

表A-2 ○職場

自宅	自宅外	無答	計
12 (57.1)	8 (38.1)	1 (4.8)	21 (100.0)

表A-3 ○勤務状況

常勤	パート	その他	無答	計
7 (33.3)	6 (28.6)	7 (33.3)	1 (4.8)	21 (100.0)

表A-4 ○職業

専門・技術職	事務職	販売職	サービス職	管理職	無答	計
4 (19.0)	5 (23.8)	5 (23.8)	4 (19.0)	1 (4.8)	2 (9.5)	21 (99.9)

高島平団地に近いこの2つの幼稚園々児の母親における就業率は16.9%であり、非就業者の81.5%と比べて大きな差がみられる。これは調査の対象が保育所ではなく、幼稚園であること、また、あとの表A-6からわかるように核家族が多く、母親以外の養育者がいないことなどが理由として考えられる。職場も自宅である場合の方が多く、勤務状況についても常勤が3分の1となっている。

(5)学歴：

表A-5

中学校	高等学校	専門学校	短期大学	大学	その他	無答	計
3 (2.4)	66 (53.2)	20 (16.1)	23 (18.5)	8 (6.5)	0	4 (3.2)	124 (99.9)

学歴については、高等学校卒業者が53.2%と半数を占めている。それ以上の学歴の人が41.1%となっており、専門学校および短期大学卒がほぼ同率を示している。

(6)家族構成：

表A-6

核家族	複合家族	無答	計
115 (92.7)	6 (4.8)	3 (2.4)	124 (99.9)

表A-7 ○家族の人数

3人以下	4人	5人	6人	7人	8人以上	無答	計
22 (17.7)	70 (56.5)	18 (14.5)	5 (4.0)	2 (1.6)	0	7 (5.0)	124 (99.9)

表A-8 ○子どもの数

ひとりっ子	2人	3人	4人	5人	無答	計
21 (16.9)	79 (63.7)	17 (13.7)	2 (1.6)	0	5 (4.0)	124 (99.9)

家族構成は表A-6を見てのとおり、核家族が90%以上を占め、「両親に子どもが2人」という類型が半数以上となっている。従って子どもが2人という家族が63.7%を占め、次にひとりっ子の16.9%、3人の13.7%である。子どもの人数が4人のところは2家族のみで、5人以上の場合は全くなかった。

(7)住居：

表A-9

一戸建	マンション	団地	その他	無答	計
23 (18.5)	25 (20.2)	64 (51.6)	8 (6.5)	4 (3.2)	124 (100.0)

表A-10 ○部屋数(玄関・トイレ・浴室は除く)

2	3	4	5~6	7~8	9以上	無答	計
17 (13.7)	47 (37.9)	29 (23.4)	17 (13.7)	2 (1.6)	0	12 (9.7)	124 (100.0)

やはり高島平団地に近いということから、51.6%が団地に住んでいる。またマンションの20.2%と合わせて、集合住宅に住んでいる人は71.8%となり、一戸建の18.5%と比べて大きな差がみられる。部屋数は3室が37.9%で最も多く、次が4室の23.4%となっている。

B. 食形態

(a). 食作法

1〈食事場所〉—「ふだん食事する部屋が決まっていますか」

表B-1

決まっている	決まっていない	無答	計
119 (96.0)	5 (4.0)	0	124 (100.0)

決まっている場合の場所

表B-2

勝手・台所				居間				その他	無答	計
勝手	台所	食堂	キッチン	居間	茶の間	リビング	ダイニング	その他		
0	38 (40.0)	28 (29.5)	0	0	24 (25.3)	0	0	0	5 (5.3)	95 (100.1)

〈食事場所〉については、まず「決まっている」との回答が96%で圧倒的に多い。しかし、決まっていた場合、その場所については、「台所・食堂」が一番多く、次に「居間」の順になっている。

2 〈食卓〉—「食卓は以下のどちらを使用するか」

表B-3

	座卓	テーブル	その他	無答	計
朝	40 (32.3)	83 (66.9)	0	1 (0.8)	124 (100.0)
夕	41 (33.1)	82 (66.1)	0	1 (0.8)	124 (100.0)

〈食卓〉については、朝・夕ともに、テーブルが66~67%と半数以上に使用され、座卓は40~41%であった。

3 〈座席〉—「食事の時、ご家族の皆さんの座席は決まっていたいましたか」

表B-4

決まっている	決まっていない	無答	計
115 (92.7)	7 (5.6)	2 (1.6)	124 (99.9)

表B-5 〈座席のだいたい決まった理由〉

	準備や片づけに便利	準備や片づけの手伝い	子どもの世話	話に上座を基準	なんとなく	テレビがよく見える	その他の	無答	計
父	1 (0.8)	0	16 (13.5)	27 (22.9)	48 (40.6)	14 (11.9)	8 (6.8)	4 (3.4)	118 (100.1)
母	90 (76.9)	3 (2.6)	16 (13.7)	0	6 (5.1)	0	1 (0.9)	1 (0.9)	117 (100.1)
祖父	1 (2.2)	1 (2.2)	0	1 (2.2)	1 (2.2)	1 (2.2)	0	40 (88.9)	45 (99.9)
祖母	1 (2.5)	1 (2.5)	0	0	2 (5)	0	0	36 (90)	40 (100.0)
子ども	2 (0.8)	8 (3.3)	19 (7.8)	10 (4.1)	91 (37.3)	16 (6.6)	23 (9.4)	75 (30.7)	144 (100.0)

その他

〈父〉・まるやま—「家の中の中心だから」

〈母〉・まるやま—「子どものトラブル防止」

〈子ども〉・まるやま—「長男は父のそばがよいというので」、「子どものトラブル防止」、「母

のそばがよいから」、「子どもを並べると遊んで食べない」

青桐—「子どもを並べると遊んで食べない」

〈決まっていない理由については〉

まるやま—「子どもに手伝いをさせるので日によって好きな場所に座らせる」、「特に理由はない」、「その時により使いわける」

青桐—「みんなでそろって食事をするのがないから」。

〈座席〉については、「決まっている」が92.7%とやはり圧倒的に多く、「決まっていない」が1.6%である。その理由をそれぞれみると、決まっていた場合の〈父親〉は「なんとなく」が40.6%、「上座を基準に」が22.9%、「子どもの世話」が13.5%、「テレビがよくみえる」が11.9%、「準備や片づけの手伝い」は0%である。〈母親〉は「準備や片づけに便利」が76.9%と大半を占め、「上座を基準に」が0%である。〈祖父〉は「子どもの世話」が0%で他はみな2.2%と同率である。〈祖母〉は「なんとなく」が37.3%、「その他」が9.4%、「子どもの世話」が7.8%、「テレビがよくみえる」が6.6%、「準備や片づけの手伝い」が3.3%となっている。これらについて言えることは、上座、下座という家族の座席のあり方がくずれ、伝統的な「イエ」制度の崩壊がみうけられる。また「居間」より「台所・食堂」が多いということは、「イエ制度」の反映より、食事の「用意」や「あとかたづけ」等の利便性が重視されている。

4 〈食器〉—「ご家族ひとりひとりの食器(箸・お茶わん・おわん等)が決まっていますか」

表B-6

決まっている	決まっていない	決まっているものと決まっていないものがある	無答	計
122 (98.4)	2 (1.6)	0	0	124 (100.0)

表B-7 〈決まっている理由〉

大きさによって	衛生面を考慮して	お互いの存在を確認するため	習慣だから	その他	無答	計
18 (14.5)	9 (7.3)	52 (41.9)	42 (33.9)	0	3 (2.4)	124 (100.0)

〈決まっていない理由〉には「家族だから特に決めない」、「子どもは茶わん、箸が同じ柄なので区別できない」。

〈食器〉については、「決まっている」が98.4%、「決まっていない」が1.6%でほとんどの家庭は各自の食器は決まっていることになる。その理由については、「お互いの存在を確認するため」が41.9%と多く、「習慣だから」が33.9%「大きさによって」が14.5%、「衛生面を考慮して」が7.3%等である。

5 〈箸箱〉—「めいめいの箸箱を使っていますか」

表B-8

使っている	使っていない	無 答	計
21 (16.9)	102 (82.3)	1 (0.8)	124 (100.0)

〈箸箱〉では、「使っていない」が82.3%、「使っている」が16.9%と使用していないほうが多く、これはおそらく、箸立てなるものにおさめていると思われる。

6 〈箱膳〉—「あなたは箱膳を使ったことがありますか」

表B-9

使ったことがある	使ったことがない	無 答	計
27 (21.7)	92 (74.2)	5 (4.0)	124 (100.0)

表B-10 〈年代〉

5-25以前	25-29	30-34	35-39	40-44	45-49	50-54	55-59	無 答	計
3 (11.1)	5 (18.5)	3 (11.1)	4 (14.8)	3 (11.1)	1 (3.7)	2 (7.4)	4 (14.8)	2 (7.4)	27 (99.9)

表B-11 〈場所〉

件数	場 所
2	福井, 東京, 山口
1	岩手県二戸市 山形県(米沢市, 東根市) 秋田県, 福島県(田村郡, 磐城郡, 大沼郡) 新潟県(見附市) 福井県(勝山市) 栃木県(芳賀市)

長野県(上伊郡)
東京,
千葉(銚子)
神奈川(川崎), 大阪府
京都府, 岡山県(岡山市)
山口県(玖河郡)
熊本県(熊本, 荒尾)

〈箱膳〉については、「使ったことがない」が74.1%、と圧倒的で、「使ったことがある」が21.8%である。〈年代〉をみると、「昭和25-29年頃」が18.5%、「昭和35-37年頃」が14.8%、「昭和55-57年頃」が14.8%とで、わずかに他より多かった程度で、大差はみられない。

〈場所〉においても、多府県にわたって使用されていて、決定的な内容が見いだせない。

7 〈食事回数〉—「毎日の食事は、朝・昼・夕の3回づつか」

表B-12

はい	いいえ	無 答	計
122 (98.4)	1 (0.8)	1 (0.8)	124 (100.0)

これについては、「朝・昼・夕の3回」という回答が98.4%で、「いいえ」は0.8%と圧倒的に3回食が定着している。〈いいえ〉の理由をみると、「昼・夕の2回、朝食は食べたくない」

8 〈食事時間〉—「食事の時間は何時頃ですか、またどのくらいの時間を必要としますか」

表B-13 〈食事開始時刻〉— (時:分)

	5:30	6:00	6:30	7:00	7:30	8:00	8:30	無 答	計
朝	0 (1.6)	0 (0.0)	3 (2.4)	29 (23.4)	60 (48.4)	27 (21.7)	3 (2.4)	2 (1.6)	124 (99.9)
夕	2 (1.6)	26 (20.9)	43 (34.7)	37 (31.5)	14 (11.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	124 (100.0)

表B-14 〈食事時間〉— (分)

	10~15	15~30	30~60	60以上	無 答	計
朝	35 (28.2)	78 (62.9)	9 (5.7)	2 (1.6)	2 (1.6)	124 (99.9)
夕	0 (0.0)	34 (27.4)	80 (64.5)	7 (5.7)	3 (2.4)	124 (99.9)

〈食事開始時刻〉については、〈朝〉は「7時30分」が48.4%と多く、「7時」が23.4%、「8時」が21.7%と、7時から8時の間に食事がとられている。〈夕〉は、「6時30分」が34.7%、「7時」が31.5%、「6時」が20.9%で、6時30分から7時頃までの間にとられている。〈食事時間〉は、〈朝〉は「15分～30分」が62.9%と多くを占め、〈夕〉は「30分～60分」が64.5%半数以上を占め、朝食と夕食とでは夕食のほうが食事にかかる時間が多いことがわかる。

9 〈食事状況〉—「食事の際はたいていご家族が全員そろいますか」

表B—15

	はい	いいえ	無 答	計
朝	64 (51.6)	59 (47.6)	1 (0.8)	124 (100.0)
夕	34 (27.4)	84 (67.7)	6 (4.8)	124 (99.9)

この項目については、〈朝〉は「はい」が51.6%、「いいえ」が47.6%、〈夕〉は「はい」が27.4%、「いいえ」が67.7%となり、朝食は全員そろっているが、わずかに多く、夕食では全員そろっていない状態が多く目立つようである。

その理由について 〈朝〉

いいえの場合 ～の関係で

表B—16

主人の勤務	私の勤務	子供の通学・通園	そ の 他	無 答	計
39 (66.1)	1 (1.7)	11 (18.6)	2 (3.4)	6 (10.2)	57 (100.0)

～の時間が多い

表B—17

主人が不在	私が不在	子どもだけ	そ の 他	無 答	計
35 (60.3)	1 (1.7)	10 (17.2)	3 (5.2)	9 (15.5)	58 (99.9)

〈夕〉

表B—18 ～の関係で

主人の勤務	私の勤務	子供の通学・通園	そ の 他	無 答	計
72 (86.7)	0	0	2 (2.4)	9 (10.8)	83 (99.9)

表B—19

主人が不在	私が不在	子どもだけ	そ の 他	無 答	計
42 (72.4)	0	4 (6.9)	2 (3.4)	10 (17.2)	58 (99.9)

「いいえ」の場合、その理由には、〈朝〉については、「主人の勤務」(66.1%)の関係で、「主人が不在」(60.3%)のケースが多い。〈夕〉については、「主人の勤務」(86.7%)の関係で、「主人不在」(72.4%)のケースが目立つ。特に夕食の 때가、朝食とくらべると、この関係のケースが圧倒的に多い。結局、主人の帰宅する時間が、圧倒的に多かった食事開始時刻の6時30分から7時までの間に間に合わないため、あろうと思われる。〈食事時間・状況〉を含めて、主人の仕事が(朝・夕)両方において、影響を及ぼし、結局、父親不在で食事がされていることである。小数ではあるが、朝食で子どもだけの時が多いというのが17.2%ある。このこともみのがせない大事な点である。

個々人があまりに自分のための時をつくるのに忙しすぎ、他人のために時間をついやすことを忘れかけているようにみえる。食卓は、家族が全員そろってはじめて、それが身につく食事となる。

10 〈食事の用意とあと片づけ〉—「食事の用意とあと片づけについての役割は」

表B—20

	私の役割	主人の役割	祖父(母)が分担	そ の 他	無答	計
用意	118 (96.7)	0	0	4 (3.3)	0	122 (100.0)
あと片づけ	113 (92.6)	1 (0.8)	0	6 (4.9)	2 (1.6)	122 (99.9)

ここでは、〈用意〉・〈あと片づけ〉共に「私の役割(回答者)」が、96.7%、92.6%と圧倒的に多く、「祖父母の分担」は0%である。

以上各項目について概念してきたが、それによって食作法について認められる傾向は、伝統的な「イエ」秩序や居住形態の変化、他方で基本的な共同体のわずかな変化、特にこの都市においては、主人（あるじ）の仕事の関係が大きな影響を与えているのと、核家族化してくると、祖父母との同居がみられないことなどからも、しだいに食作法も、食事の利便性が優位していると考えられるようである。

B. 食法

11<調理時間>—「夕食の調理時間はおおよどのぐらいかかりますか」

表B-21

～30分	30～60分	1時間～1時間半	1時間半～2時間	2時間～	無答	計
2 (1.6)	48 (38.7)	52 (42.0)	19 (15.3)	1 (0.5)	2 (1.6)	124 (100.0)

夕食の〈調理時間〉については「1時間～1時間半」が42.0%と最も多く、ついで「30～60分」は38.7%となっている。さらに、「1時間半～2時間」については15.3%となり「1時間～1時間半」の42%とあわせると過半数以上となりこれらの家庭では調理に多くの時間を費している。すなわち、料理愛好型であると同時に家庭での食事を重視している傾向にあると考えられるであろう。

12<献立>—「献立は以下のどの点を優先的に考慮されますか」

表B-22

	1位	2位	3位	4位	5位	無答	計
栄養のバランス	75 (60.5)	33 (26.6)	12 (9.8)	2 (1.6)	0	2 (1.6)	124 (100.1)
経済面	19 (15.3)	23 (18.6)	44 (35.5)	31 (25.0)	0	7 (5.7)	124 (100.1)
調理方の簡便さ	1 (0.8)	13 (10.5)	36 (29.0)	65 (52.4)	1 (0.8)	8 (6.5)	124 (100.0)
家族の好み	26 (21.0)	50 (40.3)	25 (20.2)	16 (12.9)	0	7 (5.7)	124 (100.0)
その他	0	0	0	1 (0.8)	4 (3.2)	119 (96.0)	124 (100.0)

「家族の好みで誰を優先させますか」

夫の好み	子ども	祖父母	自分	その他	無答	計
31 (25.0)	50 (40.3)	3 (2.4)	10 (8.1)	4 (3.2)	26 (21.0)	124 (100.0)

〈献立〉を考えるうえで一番に考慮される点としては「栄養のバランス」の60.5%があげられ他と比較して群を抜いる。二番目に考慮される事柄としては「家族の好み」の21%となりさらに「経済面」となっており四番目には「調理方の簡便さ」という結果を得た。ここでもやはり「栄養のバランス」を最も考慮して献立が考えられており、健康志向への傾向がみられる。

家族の好みで優先されるのは、やはり「子ども」の40.3%となり次いで「夫の好み」の25%となった。反面、「祖父母」については2.4%と低い値であった。

13<調理>—「あなたは好んで調理なさるほうですか」

表B-23

だいすき	すきなほう	どちらともいえない	あまりすきではない	きらい	無答	計
9 (7.3)	49 (39.5)	50 (40.3)	15 (12.1)	1 (0.8)	0	124 (100.0)

本項目については、「どちらともいえない」との回答が40.3%と最も高い値を示した。さらに、調理が「あまりすきではない」との回答は12.1%となり「きらい」の0.8%をあわせると12.9%となりすくなくとも1割以上の人は調理があまりすきではないといえる。反面、調理が「だいすき」の7.3%と「すきなほう」の39.5%をあわせると46.8%となり約半数は料理愛好型ともいえ、この傾向は〈調理時間〉の項目と同様の結果となった。

14<外食>—「ご家族で外食をされますか」

表B-24

することが多い	時々する	あまりしない	全くしない	無答	計
13 (10.5)	79 (63.7)	29 (23.4)	2 (1.6)	1 (0.8)	124 (100.0)

「外食をすることが多い・時々する」理由

主婦の調理からの解放	家族の気分転換	主人の帰宅が遅い	おいしいものを食べる	その他	無答	計
20 (21.7)	59 (64.1)	1 (1.1)	18 (19.6)	4 (4.3)	0	102 (110.8)

「外食をあまりしない・全くしない」理由

主人が自宅 で食べたが る	子どもがさ わいで他人 に迷惑	食費を節約 するため	そ の 他	無 答	計
20 (64.5)	2 (6.5)	4 (12.9)	6 (19.4)	0	32 (103.3)

複数回答

これについては、「時々する」の63.7%と「することが多い」の10.5%をあわせると74.2%となり7割以上の家庭では外食を時々しており、外食をする理由としては、「家族の気分転換」が64%と多く次いで「主婦の調理からの解放」の21.7%があげられた。

他方、外食を「あまりしない」との回答が23.4%、「全くしない」が1.6%でこれらを合計すると25%となり2割程度の家庭では外食をあまりしないという結果であった。その理由としては「主人が自宅で食べたがる」の64.5%が主となり「その他」の19.4%、さらに「食費を節約するため」の12.9%と続いた。「その他」の事柄としては「子どもが小さくて外食は無理、どんな料理でも作れるから」等があげられた。

15 <既製食品>—「既製の弁当、惣菜、冷凍、インスタント食品などをどう思われますか」

表B-25

よく使う	時々使う	あまり使わ ない	全く使わな い	無 答	計
5 (4.0)	69 (55.7)	45 (36.3)	5 (4.0)	0	124 (100.0)

「既製食品をよく使う・時々使う」理由

便利だから	安いから	おいしいから	別の味をとり 入れたい	そ の 他	無 答	計
64 (86.5)	0	1 (1.4)	4 (5.4)	5 (6.8)	1 (1.4)	75 (101.5)

複数回答

「既製食品をあまり使わない・全く使わない」理由

使いたくない	栄養価が低い	食品添加物に 不安がある	心がこもら ない	そ の 他	無 答	計
4 (8.0)	6 (12.0)	19 (38.0)	12 (24.0)	12 (24.0)	2 (4.0)	55 (110.0)

複数回答

本項目については「時々使う」の55.7%と「よく使う」の4.0%をあわせて59%となり6割近くの家庭では既製食品への依存傾向がみられる。

その理由として「便利」だからの86.5%は群を抜いており「別の味もとり入れたい」、「安いから」等については低い値であった。

他方、「あまり使わない」との回答は36.3%となり「全く使わない」については4.0%となっておりあわせて4割近くの家庭で既製食品をほとんど使用しておらず、その主因としては「食品添加物に不安」の38%、「心がこもらない」の24%、「その他」の24%等があげられた。「その他」の事柄としては「おふくろの味ならぬ袋の味を子どもに教えたくないから、おいしくない、衛生面が不安」等が補足される。

全体的には利便的食品志向者がわずかに多いという結果を得たが、安易に既製食品等を用いたりせず納得できる食品は使用するという賢い母親像が浮かび上がってくる。

16 <健康食品>—「最近流行の自然・健康食品については、どう思われますか」

表B-26

愛好してい る	時々ためす	ほとんど用 いない	全く用いな い	無 答	計
7 (5.6)	54 (43.6)	38 (30.7)	24 (19.4)	1 (0.8)	124 (100.1)

「健康食品を愛好している」理由

健康維持に 効果がある ので	添加物の心 配がないから	周囲で普及 しているから	そ の 他	無 答	計
19 (31.1)	40 (65.6)	0	1 (1.6)	3 (4.9)	63 (103.2)

複数回答

「健康食品を用いない」理由

効果がある と思えない	おいしくな いようなので	食費が高く つく	そ の 他	無 答	計
35 (56.5)	10 (16.1)	8 (12.9)	7 (11.3)	3 (4.8)	63 (101.7)

複数回答

健康食品については、「時々ためす」と「愛好している」との回答をあわせると49.2%となり、他方「ほとんど用いない」と「全く用いない」についての合計は50.1%となっておりそれぞれがほぼ同率であったことは大変興味をそそる結果である。

これらを愛好している理由としては、「添加物

の心配がないから」の65.6%や「健康維持に効果があるので」の31.1%が主な事柄であり反面、これらを用いない理由としては、「効果があると思えない」の56.5%が高い値となり「おいしくないようなので」の16.1%、「その他」の11.3%等もあげられた。「その他」の事柄としては「食事で充分栄養をとっており、家族全員健康だから」等の意見も出された。さらに、健康食品の

利用も広範に渡っている中で「周囲で普及しているから」の項目が0%である点にも注目すべきであろう。

17〈食材料〉－「穀類や野菜・果物などお宅でとれるものがありましたら多少にかかわらず種類・場所を記入して下さい」

表B-27

	大根	なす	小松菜	ニラ	トマト	きゅうり	パセリ	オクラ	かぶ	かいわれ大根
野菜類	4 (3.2)	4 (3.2)	4 (3.2)	3 (2.4)	3 (2.4)	2 (1.6)	2 (1.6)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)
いも類	カリフラ ワ 1 (0.8)	キャベツ 1 (0.8)	さつまい も 1 (0.8)	じゃがい も 1 (0.8)	春菊 1 (0.8)	玉葱 1 (0.8)	ねぎ 1 (0.8)	プチマト 1 (0.8)	ブロッコ リー 1 (0.8)	
果物類	柿 4 (3.2)	みかん 3 (2.4)	梅 2 (1.6)	キウイ 2 (1.6)	さくらん ぼ 2 (1.6)	りんご 2 (1.6)	ブルーベ リー 2 (1.6)	あんず 1 (0.8)	いちご 1 (0.8)	キンカン 1 (0.8)

複数回答

表B-28

食材料栽培場所

自分の庭	菜園	耕地	その他	無答	計
9 (7.3)	6 (4.8)	0	3 (2.4)	106 (85.5)	124 (100.0)

上表のごとく穀類は全く栽培されておらず野菜、果実類の栽培も少なく栽培率も1から3%程度である。栽培場所についても「自分の庭」の7.3%や「菜園」の4.8%となり、これらを利用して簡単に「パセリ、プチトマト」などを栽培している。

18〈食内容〉－「お子さんの一日の食事内容ないし献立を教えてください」

表B-29

	朝食	昼食	夕食
ごはん・(みそ汁)・副菜1～2品	29 (23.4)	11 (8.9)	4 (3.2)
ごはん・(みそ汁)・主菜の肉類のみ	1 (0.8)	6 (4.9)	3 (2.4)
ごはん・(みそ汁)・主菜の魚類のみ	4 (3.3)	2 (1.6)	10 (8.1)
ごはん・(みそ汁)・肉類・野菜類	2 (1.6)	11 (8.9)	38 (30.6)
ごはん・(みそ汁)・魚類・野菜類	6 (4.8)	1 (0.8)	39 (31.5)
パン・(牛乳またはスープ)・副菜～2品	21 (16.9)	9 (7.3)	0

	朝食	昼食	夕食
パン・(スープ)・肉類のみ	29 (23.4)	5 (4.0)	0
パン・(スープ)・魚類のみ	0	0	0
パン・(スープ)・肉類・野菜類	7 (5.6)	4 (3.2)	4 (3.2)
パン・(スープ)・魚類・野菜類	1 (0.8)	0	5 (4.0)
麺類	4 (3.3)	25 (20.2)	0
麺類・副菜1～2品	1 (0.8)	14 (11.3)	3 (2.4)
その他	7 (5.6)	20 (16.1)	10 (8.1)
無答	12 (9.7)	16 (12.9)	8 (6.5)
計	124 (100.0)	124 (100.0)	124 (100.0)

朝食については、「ごはん・(みそ汁)・副菜1～2品」と「パン・(スープ)・肉類のみ」が同率の23.4%となり、朝食全体ではごはん党が33.8%、パン党が46.7%となり約半数の家庭ではパン党であった。昼食については、給食の所が多いためか麺類の方にかたよっている。夕食に関しては、「ごはん・(みそ汁)・肉類・野菜類」の30.6%と「ごはん・(みそ汁)・魚類・野菜類」の31.5%のパターンが多いが夕食にパンを食している家庭は7.2%と低い値であった。

全体的には「主食、主菜、副菜の野菜類」とバランスがとれており賢い主婦の食内容であるといえよう。しかし、健康志向であるために和風料理が多く食内容のパターンに限られる傾向にあるといえるかもしれない。

以上食法について要約すると家族の栄養を気づかうために健康志向の傾向が強いといえるかもしれないが、時には家族で気分転換のために外食をしたり便利な既製食品も利用するが健康食品等については自己の判断のもとに取捨選択をし食生活を切換えコントロールしているように思われる。

C. 食行動

1. お子さんが食事に要する時間はだいたいどの位でしょうか

	10～15	15～30	30～60	1時間	無 答	計
朝食 F %	46 (37.1)	70 (56.5)	6 (4.8)	1 (0.8)	1 (0.8)	124 (100.0)
夕食 F %	3 (2.4)	39 (31.5)	72 (58.1)	7 (5.6)	3 (2.4)	124 (100.0)

朝食では、「15～30」(56.5%)が半数以上を占め、次いで「10～15」(37.1%)と、かなりの数を占めている。夕食については、「30～60」(58.1%)が半数以上を占め、2番目に「15～30」(31.5%)となっている。「10～15」は、朝食より(2.4%)とかなり少なくなっている。以上のように、夕食に時間をかけ、子どもとの会話を中心に家族との団らんを大切に食事をしていることがうかがわれるが、その他、食事のメニューの豊富さや、テレビをみながら食事をするということも影響していると考えられる。

2. 食事の用意やあと片づけについて、お子さんに手伝わせませうか。

(1) 用意について

表C-2

食器を並べる程度	もりつける	ほとんどさせなかった	全くさせなかった	その他	無 答	計
71 (57.3)	4 (3.2)	38 (30.6)	2 (1.6)	6 (4.8)	3 (2.4)	124 (100.0)

(2) あと片づけについて

表C-3

自分の食器だけ運ばせる	他の食器を運ばせた	食器を洗わせた	食器棚にしまわせた	ほとんどさせなかった	全くさせなかった	その他	無 答	計
49 (39.5)	25 (20.2)	4 (3.2)	2 (1.6)	33 (26.6)	6 (4.8)	4 (3.2)	1 (0.8)	124 (100.0)

食事の用意については「食器を並べる程度」が(57.3%)、となり、「ほとんどさせなかった」あるいは「全くさせなかった」(32.2%)である。あと片づけでは、自分の食器、あるいは他の食器を運ばせる、洗わせる、しまわせるが(64.5%)で、ほとんどさせない、全くさせないは(31.4%)となっている。用意に比較して、あと片づけの方がわずかではあるが、なんらかのかたちで手伝いをさせていることがうかがわれる。しかし、いずれも手伝いをさせていないものが(31.2%)となっており、食事の手伝いをさせていない親が多いことがわかる。

3. 食事のしつけについて、特に留意する事柄を以下からお選び下さい。

表C-4

A	B	C	D	E	F	G	無 答	計
35 (28.2)	47 (37.9)	82 (66.1)	50 (40.3)	109 (87.9)	31 (25.0)	8 (6.5)	3 (2.4)	365 (294.4)

複数回答

- A. 朝食の前に顔を洗わせる。
- B. 朝食の前に着がえさせる。
- C. 手を洗わせる。
- D. 毎食後に歯をみがかせる。
- E. あいさつ(「いただきます、ごちそうさま」等の唱和やお祈り)をさせる。
- F. 家族全員そろってから食べさせる。
- G. その他

あいさつをさせるわけ

表C-5

a	b	c	d	無 答	合 計
80 (73.4)	28 (25.7)	4 (3.7)	3 (2.8)	12 (11.0)	127 (116.5)

複数回答

- a. 習慣として
- b. 両親や作物、食物をつくってくれた人達に感謝するため
- c. 神、仏に感謝するため
- d. その他

食事のしつけについて最も多かったのは「あいさつをさせる」(87.9%)と圧倒的に多く、そのわけをみると「習慣として」(73.4%)を占めている。「両親や作物・食物をつくってくれた人に感謝」(25.7%)「神・仏に感謝する」は(3.7%)にすぎないが、ただ漠然とあいさつをしている中にも、人々に感謝する気持ちがわずかながら入っていることがうかがわれる。2番目に、しつけとして留意されていることは「手を洗わせる」(66.1%)となり「歯をみがかせる」(40.3%)、「朝食の前に着がえさせる」(37.9%)、「朝食の前に顔を洗わせる」(28.2%)と続いている。また「家族そろってから食べさせる」(25.0%)は、決して多くはないが、父親の仕事上の理由も含め、子どもを中心に食事が行なわれていることもうかがわれる。

4. 食事中お子さんに特に留意する事柄について○をつけて下さい。

表C-6

ひじをついて食べない	姿勢正しく座わる	寝ころばない	立ち歩かない	大きな声で話しをしない
74 (59.7)	74 (59.7)	20 (16.1)	44 (35.5)	4 (3.2)
キョロキョロわき見をしない	クチャクチャとかむ音をたてない	迷い箸をしない	箸をごはんに立てない	こぼさない
6 (4.8)	33 (26.6)	13 (10.5)	30 (24.2)	51 (41.1)
残さない	好き嫌いを言わない	その他	無答	合計
69 (55.6)	73 (58.9)	6 (4.8)	2 (1.6)	499 (402.4)

食事中の留意点については、「ひじをついて食べない」(59.7%)、「姿勢正しく座わる」(59.7%)、などの食事時の態度や姿勢、さらに「好き嫌いを言わない」(58.9%)、「残さない」(55.

6%)、の食物を大切にするといった2点が重視されている、また「寝ころばない」(16.1%)などが少ないのは「イス」の生活が主となっていることの影響も考えられるだろう。また「箸をごはんに立てない」(24.2%)、とわずかではあるが、古くからの言い伝えが食生活の中にのこされているということであろう。

5. 食事の際、次のような場合にはお子さんにどのように注意なさいますか。

(1) 床や畳にこぼしたら

表C-7

食べさせる	ひろわせる	注意をする	その他	無答	計
4 (3.2)	73 (58.9)	34 (27.4)	6 (4.8)	7 (5.6)	124 (100.0)

(2) 食卓の上にこぼしたら

表C-8

食べさせる	ひろわせる	注意をする	その他	無答	計
30 (24.2)	47 (37.9)	33 (26.6)	5 (4.0)	9 (7.3)	124 (100.0)

(3) 口のまわりや衣服につけたとき

表C-9

食べさせる	ひろわせる	注意をする	その他	無答	計
11 (8.9)	68 (54.8)	31 (25.0)	3 (2.4)	11 (8.9)	124 (100.0)

★「ひろわせる」については、「ふかせる」「食べさせない」も含む、食べさせたかどうかは不明

(4) 食べるこした時

表C-10

食べさせる	無理には食べさせない	注意をする 食べたかは不明	その他	無答	計
28 (22.6)	35 (28.2)	38 (30.6)	10 (8.1)	13 (10.5)	124 (100.0)

(5) 好物が出されてその量が少なくと不満を言った時

表C-11

あげる	あげない	注意する・納得させる	その他	無答	計
26 (21.0)	5 (4.0)	66 (53.2)	9 (7.3)	18 (14.5)	124 (100.0)

(1)においては、「ひろわせる」(58.9%)、が半数以上を占め、次に「注意する」(27.4%)、と

「子どもの食生活と躰についての総合的研究」(5)

なる。「食べさせる」はわずか(3.2%)、だけである。(2)では「ひろわせる」(37.9%)、「注意をする」(26.6%)であるが、「食べさせる」は(24.2%)、とやはり減少きみである。(3)についても「ひろわせる」(54.8%)、が半数以上を占め、次に「注意をする」(25.0%)、となる。「食べさせる」はやはりわずか(8.9%)だけである。以上の結果、(1)、(2)、(3)では「食べさせる」ということが比較的少なく、これらは衛生面を考慮したり、また現代の食糧事情の豊かさの反映の結果でもあるといえよう。また注意をすることが他地域より少なく具体的にひろわせることが多いのも特徴といえる。

(4)では、「注意をする」(30.6%)、「無理には食べさせない」(28.2%)、とほぼ同じ割合となっており、「食べさせる」は(22.6%)、となる。納得をさせ、また無理におしつけたりということはあまりなかったようである。(5)では、「注意する」(53.2%)と半数以上を占めているが、「あげない」(4.0%)、に対して「あげる」(21.0%)、とわずかではあるが、子どもの要求を満たしている点もうかがえる。

6. お子さんは食べ物に好き嫌いがありますか。

表C-12

あ る	な い	無 答	計
85 (68.5)	36 (29.0)	3 (2.4)	124 (100.0)

(1) 嫌いな食べ物

表C-13

野菜	生 野菜	ピーマン	ネギ	ト マ ト	にんじん	きのこ類	しいたけ
29	3	22	9	6	6	1	3
たけのこ	きゅうり	かぼちゃ	ご ぼ う	セ ロ リ	なす	いか	卵
1	1	2	1	1	1	1	2
乳 製 品	納豆	かまぼこ	果物	魚	バ ナ ナ	ケ ー キ	酢 の 物
3	4	1	1	3	1	1	1
カレーライス	シチュー	うどん	レタス	ほうれん草	その他	無答	計
1	1	1	1	1	3	1	113

表C-14

偏食しないように調理を工夫した	身体に良いからなど注意した	一口でも必ず食べさせた	しいて食べさせない	そ の 他	無 答	計
38 (44.7)	42 (49.4)	41 (48.2)	9 (10.6)	2 (7.4)	0 0	132 (155.3)

複数回答

好き嫌いについては、「ある」(68.5%)、「ない」(29.0%)、となる。他地域より好き嫌いが多いということがわかる。嫌いな食べ物では野菜類に偏り、特にピーマンが多い。これらの対応策として、「身体によいからなど注意した」(49.4%)、「一口でも食べさせた」(48.2%)、「調理の工夫」(44.7%)、「しいて食べさせない」(10.6%)、となっている。子どもに嫌いな食物がある場合、注意したり、少しでも食べさせたり、また調理に工夫して、体力の向上を考えての、親の努力がやはり、他地域より多いということがうかがえる。

7. 箸の持ち方については

表C-15

親を見習わせる	手をとって教える	言葉で説明する	注意しない	そ の 他	無 答	計
33 (26.6)	68 (54.8)	23 (18.5)	7 (5.6)	5 (4.6)	6 (4.8)	142 (114.5)

複数回答

ここでは、「手をとって教える」(54.8%)、が比較的多く、「親を見習わせる」(26.6%)、「言葉で説明する」(18.5%)、「注意しない」(5.6%)、となり、具体的に手をとって教えている親が多いが、親を見習わせたり、言葉で説明したりと、箸の持ち方についてはかなり関心が向けられている。

8. 食事中テレビをつけておられますか。

な い	いいえ	無 答	計
59 (47.6)	61 (49.2)	4 (3.2)	124 (100.0)

その理由

表C-17

家族の会話 が失われる	子どもが食 事に集中で きない	子どもの食 事に対する 感謝の気持 がうずれる	そ の 他	無 答	計
12 (19.7)	52 (85.2)	5 (8.2)	1 (1.6)	3 (4.9)	73 (119.7)

複数回答

食事中テレビをつけているでは、「はい」(47.6%),「いいえ」(49.2%),とあまり差はない。つけない理由として,「食事に集中できない」(85.2%),が非常に多い。ここでは「食事中に静かに,きちんとして食べる」ということよりも,楽しく会話をしたり,時間をかけて食べる,あるいはテレビを見ながら食事をするということが一般的になっていることを示唆している。

9. 食事のしつけについてお宅では

(1) その程度

表C-18

きびしい方 である	かなり心が けている	どちらとも いえない	あまりしな いほうであ る	全くしない と言っても よい	無 答	計
16 (12.9)	71 (57.3)	28 (22.6)	8 (6.5)	0	1 (0.8)	124 (100.0)

(2) 食事のしつけの主は

表C-19

主 人	私	父	母	そ の 他	無 答	計
22 (17.7)	97 (78.2)	1 (0.8)	0	3 (2.4)	1 (0.8)	124 (100.0)

(1)では,「かなり心がけている」(57.3%),「き

びしい方である」(12.9%),と半数以上が「食事のしつけ」について積極的な姿勢を示している。しつけの主については,「私」つまり母親が(78.2%)と非常に多く,幼児の食事のしつけが,ほとんど母親にまかされている。

以上,子どもの食行動について,その結果を中心に述べてきた。要約すると,戦前,戦後に比べて,食糧も豊富になり,食事のしつけについても,「食べる」ことを大切にするということから,衛生面や栄養面を考慮したものへと変化してきた。そして,子どもに対しても,ことばで説明する,注意するといったことに重点がおかれ,強制的におしつけたり,行動させるということは少なくなっている。しつけの程度としては,かなり積極的な姿勢がみられるが,子どもの好き嫌いの多さ,あるいは,子どもの不満に対しても比較的親の寛容さがみられることは,反面今日の過保護につながっていく。その結果,子どもの「甘え」が生まれていくことは多に予想されるであろう。

D. 食習慣

1 〈行事食〉-「(年中)行事の日には,特別に食事を作ってあげますか」

表D-1

	必ず作る	時々作る	どちらとも 言えない	ほとんど作 らない	全く作らな い	無 答	計
お正月	107 (86.4)	5 (4.0)	3 (2.4)	3 (2.4)	3 (2.4)	3 (2.4)	124 (100.0)
ひなまつり	66 (53.1)	27 (21.8)	6 (4.8)	10 (8.2)	9 (7.3)	6 (4.8)	124 (100.0)
お彼岸	23 (18.5)	19 (15.3)	9 (7.3)	34 (27.4)	29 (23.4)	10 (8.1)	124 (100.0)
子どもの日	57 (46.0)	25 (20.2)	12 (9.7)	14 (11.3)	10 (8.1)	6 (4.7)	124 (100.0)
お盆	20 (16.1)	12 (9.7)	9 (7.2)	31 (25.0)	40 (32.2)	12 (9.7)	124 (100.0)
十五夜	13 (10.5)	16 (12.9)	8 (6.5)	30 (24.2)	45 (36.3)	12 (9.6)	124 (100.0)
クリスマス	98 (39.1)	10 (8.1)	4 (3.2)	4 (3.2)	4 (3.2)	4 (3.2)	124 (100.0)
七五三	66 (53.2)	16 (12.9)	17 (13.7)	12 (9.7)	6 (4.8)	7 (5.7)	124 (100.0)
誕生日	111 (89.5)	4 (3.2)	4 (3.2)	3 (2.4)	0	2 (1.7)	124 (100.0)
そ の 他	命日:入園時の祝事やお宮参り1 父母の誕生日1,結婚記念日3						

まずくお正月については、「必ず作る」が86.4%で最も高い比率を示している。これは今日でもなおくお正月が日本の代表的な伝統行事の一つとして、人々の生活の中に定着していることを表わすものである。

くひなまつりについては、「必ず作る」が53.1%で僅かに半数を越す程度であるが、「時々作る」の21.8%を加えると74.9%で、全体の約¾に相当する。これは先のくお正月に比べるとその比率は若干低いものの、やはり日本の伝統行事として重視されていることを物語るものと言えよう。

しかし次のく彼岸については、春・秋の年二回の仏事、仏参も包括するが、「必ず作る」が18.5%で「時々作る」15.3%を加えても33.8%にすぎない。これはく彼岸が日本の伝統行事ではあるものの、今回の調査対象が団地やマンション等々に住む、謂ゆる若い世代の核家族で、直接仏事にはかかわっていないことの結果と言えよう。

く子どもの日については、「必ず作る」が46.0%で半数にみえないが、「時々作る」20.2%を加えると66.2%で、全体の約⅔の家庭で何らかの行事食を作っていることになる。く子どもの日」が児童福祉の精神にのっとり、国民の祝日として制定されたのは比較的最近のことであるが、古来の端午の節句とあいまって一行事として定着しつつあることが窺われる。

くお盆については、「必ず作る」が16.1%でその比率は大変低く、仏事という点では先のく彼岸に比肩する。これもやはり核家族化に伴う現象と考えられる。

またく十五夜については「必ず作る」が10.5%で更に低く、「時々作る」12.9%を加えても全体のおよそ2割強にすぎず、任意にあげた行事の中でも行事食を作る度合は最も低い。反対に「全く作らない」「ほとんど作らない」は60.5%で高い比率を示している。これは生活環境が本来の意味である「豊饒に感謝する」こととはほとんど無縁であり、また「観月を愉しむ」と

いう点においても、高層建築や街灯等の住宅事情が多分に影響していると考えられる。

くクリスマスについては、「必ず作る」が79.1%で高い比率を示している。周知のように、くクリスマス」はキリスト教最大の行事であるが、「全く作らない」「ほとんど作らない」が6.4%であることを見ても、我国でも慣行としてその定着の顕著さがわかる。しかし「必ず作る」家庭が全てクリスチャンというわけでもないことから、単に商業主義にあおられて盛大化したものと推察される。

く七五三については、「必ず作る」が53.2%で半数を僅かに越えるにすぎないが、「時々作る」12.9%を加えると66.1%で、全体の約⅔の家庭が行事食として重きを置いていることになる。く七五三」は本来各々の地方により、年令や男女の違いでその祝い方も異なるが、東京では全国から出身者が集まっていることから、一律に男女別なく七・五・三と祝うのが一般的傾向とされているようである。しかしこれも明治時代以降の風潮であり、先のくクリスマス」同様、著しい商業主義化の反映とも言えよう。

く誕生日については、「必ず作る」が89.5%で群を抜いており、比率的にはくお正月」を凌いでいる。しかしこれについてもくクリスマス」同様、欧米の影響が大で、併せて著しい商業主義化によるものと考えられる。

最後にくその他」として、身内の命日や結婚記念日、入学やお宮参り等々があげられているが、これらはいずれも家族や個人を中心としており、この点においては先のく誕生日」などは、その最たるものと言えよう。

また更に、以上の行事について行事食を「必ず作る」比率の高いものからあげると、1 く誕生日」、2 くお正月」、3 くクリスマス」、4 く七五三」、5 くひなまつり」、6 く子どもの日」、7 く彼岸」、8 くお盆」、9 く十五夜」の順になる。これによればくお正月」を除いてく誕生日」くクリスマス」く七五三」くひなまつり」く子どもの日」等々の子どもを主体としたものが上位を

占めていること、又、行事が概ね家族や個人を単位にしていることが注目される。そしてこれらの行事は、いずれもが欧米化や商業主義と深くかかわっていることに留意せざるをえない。

2 〈行事食の意味、いわれ〉—「行事食の意味ないしいわれについて、お子さんに話してあげますか」

表D-2

たいてい話す	ほとんど話さない	無 答	計
78 (62.9)	39 (31.5)	7 (5.6)	124 (100.0)

上記の表によれば「たいてい話す」が62.9%と高い割合を示しており、「ほとんど話さない」31.5%のおよそ2倍に相当する。しかしこの「ほとんど話さない」家庭の子どもも、現代のような情報化社会では家庭以外からの情報量も豊富であるから、概ねこれらの行事及び行事食は伝達されるものと考えられる。

3 〈仏壇・神棚・祠〉—「お宅には仏壇や神棚・祠がございますか」

表D-3

神棚+仏壇+ α	神棚+仏壇	神 棚	仏 壇	そ の 他	無 答	計
1 (0.8)	4 (3.2)	13 (10.5)	14 (11.3)	3 (2.4)	89 (71.8)	124 (100.0)

(その他…荒神1、稲荷1、祖父母の写真2)

まず上表の見方について、〈神棚+仏壇+ α 〉は神棚と仏壇とそれ以外に祀るものがある場合、〈神棚+仏壇〉は神棚と仏壇の2つを祀っている場合、同様に〈神棚〉は神棚のみ、〈仏壇〉は仏壇のみ、〈その他〉は以上に属さないものを祀っている場合である。更に欄外は〈 α 〉及び〈その他〉の内訳を明記したものである。

これによれば、祀りもののある家では〈仏壇〉が11.3%で最も多く、次いで〈神棚〉10.5%、〈神棚+仏壇〉3.2%、〈神棚+仏壇+ α 〉0.8%、〈その他〉2.4%の順になる。更にこれを全体の中での仏壇・神棚の各保有率についてみると、〈仏壇〉は15.3%、〈神棚〉は14.5%で、〈仏壇〉の方が僅少だが〈神棚〉を凌いでいること

になる。しかしこれも〈無答〉71.8%（「祀りものがない」意の「なし」を含む）と比較すればその比率は大変小さく、ほとんどの家では信仰と特に深いかわりをもっていないことがわかる。またこの項目で特に留意すべき点は〈神棚〉の解釈の仕方、祀りものが性格分類上「神」であれば〈神棚〉には多数の神々が祀られることになるわけである。従って神々を詳細に区分すれば〈その他〉は増えることになる。

3-(2)-「(ある場合) ごはんや水等、毎日お供えなさいますか」

表D-4

毎日供える	毎日供え行事食等も供える	行事食や旬のものを時々供える	ほとんど供えない	供えることはまずない	無 答	計
20 (57.1)	1 (2.9)	11 (31.4)	2 (5.7)	1 (2.9)	0 (0)	35 (100.0)

供える理由

a. 家の習慣で	5(15.6)
b. 先祖や故人となった身内を偲んで	10(31.2)
c. 神や仏への感謝と家の幸福を願って	25(78.1)
d. その他	1(3.1)
無 答	1(3.1)
計	83(131.1)

(複数回答)

まずこの表の見方について、任意に用意した回答項目はA-〈毎日供える〉、B-〈行事食や旬のもの〉、または特別に調理した場合など、時々供える、C-〈ほとんど供えない〉、D-〈供えることはまずない〉の4項目だが、集計時A及びBという複数回答があったので、これを予想される行動として考え、新たに〈A+B〉の回答項目を設けたものである。

これによれば、仏壇や神棚、その他にご飯や水等を〈毎日供える〉が57.1%で過半数を占め、更に〈季節のものを時々供える〉31.4%、〈毎日供える他に季節のものを時々供える〉2.9%を算入すると91.4%になり、祀りもののある家のほとんどに相当する。また〈供える理由〉については〈神・仏への感謝と家の幸福を願って〉が78.1%と最も多く、〈先祖や故人の身内を偲ん

「子どもの食生活と躰についての総合的研究」(5)

で>31.2%, <家の習慣で>15.6%の順で続いている。つまりこれら祀りもののある家のほとんどが、神仏に対して畏敬や感謝の念を抱いていると言えよう。

更に子どもについては<供えさせる>が68.6%で半数を越しており、祀りもののある家では、その信仰心は概ね子ども達に浸透していると考えられる。

3-(3)-「(同様にある場合) お子さんにも供えさせますか」

表D-5

供えさせる	供えさせない	無 答	計
24 (68.6)	68 (17.1)	5 (14.3)	35 (100.0)

4<ことわざ>-「食事のことわざについて」
表D-6

◎お子さんに話したことがあるもの

○御存知のもの

／御存知ないもの

	◎+○			／	計
		◎	○		
a. ご飯を食べながら背伸びをすると、ご飯が腹に入らず背中の方に入って死ぬ	13 (10.5)	3 (2.4)	10 (8.1)	111 (89.5)	124 (100.0)
b. 肘をついてご飯を食べると地震がくる	5 (4.0)	1 (0.8)	4 (3.2)	119 (96.0)	124 (100.0)
c. 寝ころんでもものを食べたり、食べてすぐ横になると、牛になる	121 (97.6)	82 (66.1)	39 (31.5)	3 (2.4)	124 (100.0)
d. 一杓子で茶碗一杯のご飯を盛るな	48 (38.7)	1 (0.8)	47 (37.9)	76 (61.3)	124 (100.0)
e. 左手でご飯を盛るな	12 (9.7)	0 (0)	12 (9.7)	112 (90.3)	124 (100.0)
f. こぼした飯粒は必ず拾え、さもないと眼がつぶれる	81 (65.3)	37 (29.8)	44 (35.5)	43 (34.7)	124 (100.0)
g. 朝食に汁をかけて食うと出世しない	22 (17.7)	3 (2.4)	19 (15.3)	102 (82.3)	124 (100.0)
h. お赤飯に汁をかけて食うと、結婚式や葬式の日に雨(雷)が降る	28 (22.6)	3 (2.4)	25 (20.2)	96 (77.4)	124 (100.0)
i. 正月の七草粥と15日の小豆粥を吹いて食ってはいけない。田植えの時大風が吹く	4 (3.2)	1 (0.8)	3 (2.4)	120 (96.8)	124 (100.0)
j. 箸から箸で食べ物を受け渡しするな	113 (91.2)	72 (58.1)	41 (33.1)	11 (8.8)	124 (100.0)
k. 風呂の中でもものを食うと親の死に目に会えない	2 (1.6)	0 (0)	2 (1.6)	122 (98.4)	124 (100.0)
l. 食器を箸でたたくと蛇が入ってくる	65 (51.3)	5 (4.0)	14 (11.3)	105 (84.7)	124 (100.0)
m. 食器の口の欠けたものを食膳に出すと客が不幸になる、女はお産が重くなる	7 (5.6)	0 (0)	7 (5.6)	117 (94.4)	124 (100.0)
n. 食事中、立って座席をあちこち移動すると、嫁入り先が決まらない、嫁に行つて腰がすわらない	24 (19.4)	10 (8.1)	14 (11.3)	100 (80.6)	124 (100.0)
o. その他 ごはん粒に神様が12人いるので残さないように					

まず上表の見方について、初めにa～nは一般的な食事につながる故事を任意に用意したものである。◎は「子どもに話したことの あるもの」すなわち既に「伝承したもの」であり、○は「(自身に) 既知のもの」で「子どもに話さなかった」を含意して「伝承しなかったもの」となる。またしかし◎は「子どもに話したことがある」以上「既知」を前提としているわけであるから、従って◎+○は既に「伝承されていたもの」となる。更に／は「知らなかったもの」であるだけに「伝承されていなかったもの」として受け取ることができる。

そこで各項目についてその特長を概括すると、まず◎+○についてc-97.6%ではほぼ総数を示しており、次いでj-91.2%, f-65.3%となる。そして◎+○に対する◎の比率についてはこれは「伝承されていたもの」を「伝承した」つまり「伝承されたもの」の内容と度合を示すものであるが、c-「外面的態度の矯正」が97.6%:66.1%で最も大きく、次いでj-「宗教的禁忌」が91.2%:58.1%, ◎の比率は低くなるがf-「社会化への導入」65.3%:29.8%, d-「宗教的禁忌」38.7%:0.8%となる。また○については全体的に数値は低く間ばらではあるが、d-37.9%, f-35.5%, j-33.1%, c-31.5%の順になる。更にこれらを◎+○に対する比率でみると、これは「伝承されていた」にもかかわらず「伝承しなかったもの」つまり「伝承されなかったもの」の内容と度合を示すものだが、較差比率の小さい程、伝承率が低いわけであるから、d-「宗教的禁忌」38.7%:37.9%, f-「社会化への導入」65.3%:35.5%, j-「宗教的禁忌」91.2%:33.1%, c-「外面的態度の矯正」97.6%:31.5%の順になる。従って以上のことから「伝承されたもの」と「伝承されなかったもの」とは相反しており、同時に裏付けあっていることがわかる。

以上の集計結果から、大都市における食習慣の特長は、〈行事食〉については近代文化の著しい導入によって、日本古来の伝統行事がそれら

に押され気味であること、また共同体よりも個々を基本とした祭祀形態が色濃くなっていることにあると思われる。また「祀りもの」については、住宅環境や家族構成が多分に影響しており、その保有率は低い。従って〈供え物〉に対する意識も「祀りもの」がある家では高いが、やはり地域全体では低いものと言えよう。更に〈故事〉については、「外面的態度の矯正」が最も重視されており、反対に「宗教的禁忌」や「社会化への導入」が後退している。つまりこれら一連の現象は、日本古来の食文化の伝統的意義が消失しつつあることを示している。

E. 総括

1. 高島平近辺は、都会の典型的な新興住宅地であり、集合住宅の多い地域である。住人は日本各地から集まり（箱膳の調査でも推定される）、核家族が多い。3部屋までの集合住宅に居住している家庭が多いという点で住構造の類似がみられ、その結果、食事場所、食卓の形も決まってくる。つまり、食堂、台所において、テーブルで食事をとるという家庭が多い。食堂、台所などでは、上座、下座の意識も少くなり（最近ではテレビのよく見える席が上座という意識がみられるが）、上座を基準にして座るという考えが薄れてくる。

都市の家庭においては、父親不在の食事風景が多くみられ、特に夕食では、72.4%と大きな値を示している。その上、母親が家庭ににいるのに子供だけで食事をするという現象があり、いわゆる「孤食」は、精神的にも身体的にも満たされないという影響がみられるようになる。しかし、当地域の母親は専業主婦が多いので調理時間も1～2時間かけているし、栄養のバランスを第1にして献立をたてている。「主食+主菜+副菜」（炭水化物+たんぱく質+ビタミン）というバランスのとれた食事を心がけている。この既製食品の氾濫している世の中で40%近い家庭でほとんど既製食品を使用していないという結果には、心強く感じられる。

現在は、「一億総グルメ志向」といっても過言ではない時代である。テレビをつければ料理の作り方、食べ歩き、食物に関するクイズなどが毎日のようにみられ、「まんが」にまで登場してくる。特に東京では、世界各国の料理も手軽に食べられる。そのような環境の中で、料理に関心をもつ母親が増加していることは、子どもにとって良い傾向にあるといってもよいであろう。その反面、マスメディアの影響は大きく、従来、家庭の中で食事をとおして伝えられていた食形態の数々が、親とはなれて核家族化していく傾向とあいまって、変化していくように思われる。

食生活に問題のある子どもは、食に限らず、身体・精神的側面、生活全般に問題を持ちやすいことは再三述べられている。子ども自身の生理的原因以外は、食生活を導く大人の問題とも言われる。そして食に関するしつけは、その主体者が置かれた時代的背景、文化的、社会的背景を抜きにしては考えられない。当地域の食行動、食習慣もその地域性を明確に投影している。すなわち、都市の特性が食生活のしつけや習慣にみられるということである。たとえば、子どもの好き嫌が多いこと、それに対処するのに母親が多くの努力を払っている様子がうかがわれることもその一例であろう。又、食物を大切にするという点で、こぼした物をどう処理させるかについても、言葉で注意を与えるだけより、ひろわせる等具体的なしつけが多く行なわれており、幼児に適したしつけ方法がとられているようである。しつけに対する関心も高く、又、父親のしつけへの参加も他地域より多くみられることも当地域の特徴である。

食習慣においては「高層マンション」、核家族という典型的な構造の中で、伝統的な行事そのものの伝承は薄れ、又、祖先を祭ることも減少しており、特に神仏をまつる環境そのものが各家庭にみられなくなっていることが大きな特徴と言えよう。食の伝統的、文化的意味を継承する具体的な場がなくなっていると言える。

具体的な食のしつけに対する関心の強さが、

単に食を目先の事柄として把握するに止まらず、広く人間文化を見つめる方向性を見出すことによって、食のしつけが更に意義深いものとなることが期待される。

誤

正

- P. 7 表B-2
 食堂18 (0. 4) → 18 (8. 4)
- P. 7 右側 上から20行目
 「家族が多いから、一緒に
 食べられないから」 → 削除する
- P. 9 左側 上から一行目
 箸置 → 箸箱
- P. 10 左側 上から6行目
 B → (b)
- P. 18 右側 上から10行目
 外来化 → 外来文化
- P. 27 表A-3
 常務 → 常勤
- P. 27 表A-4
 その他 → 無答
- P. 31 左側 表B-19以下4行目
 B → (b)
- P. 50 右側 上から20行目
 <祖母> → <子ども>
- P. 53 左側 上から10行目
 B → (b)
- P. 62 表D-6 ㊦ の◎+○
 65 (15. 3) → 19 (15. 3)
- 研究報告 第9集、別冊を通して
 「複合家族」 → 「拡大家族」